



ふきのとう郷愁 音読のすすめ

校長 渡邊 圭三

先週、5年生の移動教室の实地踏査に行ってきました。宿泊先は長野県の山中にあり、季節が一月以上戻った感じで、部屋の窓からは地面から「ふきのとう」と思しきものが顔を出しているのが見える、まさに早春の風景。ふきのとうを見て、私が担任時代、2年生の国語の教科書に載っていた工藤直子さんの作品を思い出しました。以下、一部抜粋したものです。

ふきのとう

よが あけました。

あきの ひかりを あびて、

竹やぶの 竹の はっぱが、

「さむかったね。」

「うん さむかったね。」

と ささやいて います。

雪が まだ すこしの こつて

あたりは しんと して います。

どこかで、小さな こえが しました。

「よいしょ、よいしょ。おもたいな。」

竹やぶの そばの ふきのとうです。

雪の下にあたまを出して雪をどけようと

ふんばって いる ところ です。

「よいしょ、よいしょ。そとが 見たいな。」

(中略)

はるかぜに ふかれて、

竹やぶが、ゆれる ゆれる、おどる。

雪が、とける とける、水になる。

ふきのとうが、ふんばる、せが のびる。

ふかれて

ゆれて

とけて

ふんばって

——もっこり。

ふきのとうが、かおを

出しました。

「にんちちは。」

もう、

すっかり はるです。

光村図書「こくこ二王たんぼほ」より

長い冬が終わり、待ちわびていた春を迎える喜びを、ふきのとう、竹の葉っぱ、雪、お日様、春風たちの会話を通して表現されたほのぼのとした作品で、リズム感もよく、子供たちにとって親しみやすいものとなっています。進級したばかりの子供たちがこの魅力的な作品を張り切って音読し、最後に班ごとに発表会を開くことができました。その背景には、授業中だけでなく、家庭での音読の宿題があります。保護者の方のご協力もあって、子供たちは家庭でも繰り返し音読に意欲的に取り組んでいたのです。音読には、自分が理解しているかどうかを確かめる働きや理解したことを表出する働きがあり、響きやリズムを感じながら言葉の意味を捉えることにも役立ちます。低学年では、明瞭な発音で文章を読むこと、ひとまとまりの語や文として読むことなどを大切にします。文字を確かめ、内容が理解できるか、どのように感じるかなどを、自分の声を自分で聞きながら、時には周りで聞いてもらいながら把握していくのです。そして、高学年になると、文章の構成や内容を理解して音声化することに加え、自分の思いや考えが聞き手に伝わるように音読や朗読することを指導していきます。

両国小でも、今月は1年生を除く各学年で音読の宿題を出しています。お忙しい中、お子さんの音読に付き合うのはなかなか大変かと思いますが、ただ読んでいるのではなく、上記のような意味合いがあることをご理解の上、ご協力をお願いいたします。各ご家庭で、子供たちの音読の声が響き、国語科教材の楽しさや豊かさを共有していただければ幸いです。